

📷 第17回いわきサンシャインマラソン 📄

📍 平・小名浜

📅 2/22(日)



＼全国各地から約8,000人のランナーが集結／

大会を盛り上げようと、多くの方が沿道から声援を送ったほか、江名港付近では、大漁旗を振った応援団体が出迎え、ランナーの背中を押していました。また、約1000人のボランティアが給水や案内などを行い、大会運営を支えました。

このような取り組みがランナーに支持され、ランニングポータルサイト「RUNNET」の評価ランキングにおいて、フルマラソンの部で全国1位となりました（3月4日時点）。

📷 いわき七浜おさかなフェスティバル2026 📄

📍 道の駅いわき・ら・ら・ミュウ

📅 3/7(土)



＼魚を知って、もっと好きになる／

本市では、^{さかなの}3月7日にちなみ、毎月7日を魚食の日と定め、魚食文化の推進を行っています。

本イベントでは、魚を「知って」「触れて」「食べて」楽しみ、魚食を身近に感じてもらうことを目的に、さまざまな企画を開催しました。

普段は手に取ることが少ない生の魚に触れたり、自分で調理したりと、子どもたちにとっては、魚をより身近に感じる機会になりました。

写真が語る「いわき」の歴史 「一山一家」の言葉に潜むもの

いわき地域学會 小宅幸一

今「一山一家」は会社の経営者と従業員が一体となって融和に努めながら業績アップにつなげているというような意味で、かつての常磐炭礦が掲げた言葉を引用して使っています。

これだけを切り取ると、良い言葉の響きとして理解されていますが、その出発点の状況をみると、経営陣と労働組合の双方にとってそれぞれが会社内で分裂の危機感を抱いていたことが分かります。

昭和21、22（1946、47）年のことです。常磐炭礦(株)は戦時中に政府の意向を受けて入山採炭(株)と磐城炭礦(株)が合併したのですが、社風が異なっていました。このため戦後、アメリカ・GHQの指令による財閥解体の措置では、入山は会社の合併維持を、磐城は元へ会社分離を、それぞれに主張して分裂状態でした。

労働組合も常磐炭礦の湯本礦は中立、鹿島坑（昭和30年に鹿島礦）や磐崎礦は共産党系、内郷礦は社会党のなかの右寄りとそれぞれ支持政党がばらばらでした。

それに社内の立場が加わります。炭鉱会社はかつて経営陣・職員と現場坑夫の待遇には大きな格差があったのですが、戦中・戦後の荒廃した世情のなかで、双

方とも貧困の影を引きずっている状態で、実質的にかつてのような身分格差とはなっていませんでした。また、戦争に加担したとして企業経営陣の多くは公職追放に遭って会社を去っていました。刷新された新たな経営陣は、労働者側にシンパシーを抱いていました。

このような錯綜した数々の困難を克服するため「一山一家」が合言葉に掲げられ、転じて一山一家となったのです。最初の状況は時代を経るなかで、いわば角が取れた丸い言葉になったといえます。



■写真 常磐炭礦鹿島坑炭鉱住宅の一角に建てられた「一山一家」の入った標柱
【昭和28（1953）年10月 常磐興産(株)提供】